



TITLE:

1928年を迎ふ: 卷頭言

AUTHOR(S):

---

CITATION:

1928年を迎ふ: 卷頭言. 天界 1927, 8(82): 1-2

ISSUE DATE:

1927-12-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161226>

RIGHT:



## 1928年を迎ふ

(巻頭言)

吾人は茲に1928年を迎へて、天界ますます多事なるを感ずる。去る1924年以來、<sup>とし</sup>歳を逐ふて増進して來た太陽の黒點活動は、いよいよ今<sup>こん</sup>1928年に入つて、多分この春の頃、頂點に達する見込みである。従つて此の年が現<sup>げん</sup>二十世紀に於ける第8回目の黒點極大期として永久に記憶される年だらう。吾人は全世界の太陽觀測家と共に熱心なる研究心を以つて天空の此の異常なる現象に臨まねばならない。——今1928年度は6月初めに土星が最近距離に來り、此の頃、輪の幅が土星體の南北徑を超ゆるこそ實に2秒角といふ珍らしい景色を現出する。一般アマチュアは言ふも更なり、望遠觀測に従ふ専門家たちは、此の機を利用して土星輪の研究をなすと共に、輪による微光恒星の掩蔽現象などを見のがさないやうにすべき時機であらう。土星は蛇<sup>へびつか</sup>遣ひ座の南邊にあつて、歐州の觀測者には不便であるが、南半球の天文家たちと共に、我が國の諸天文臺は此の星の觀測に些の不便を感じない筈である。——近年の遊星表面學界に於ける木星赤斑の問題は特筆するに値すると言ひ得やう。今世紀の初期以來漸次消滅(?)の一路をたざりつゝ、あつた此の赤斑が、一兩年來、俄然復活して著しき其の光彩と輪廓を現はし來つたことは、あらゆる意味に於いて、吾人の興味を新たにするものである。顧みるに此の1928年は、赤斑が木星面上に現はれ始めた1878年から

數へて正に50ヶ年目であたる。赤斑其のものゝ復活と共に、吾人は今此の星の、此の特種な謎に對する半世紀の觀測史を顧みて、究學上、何等かの暗示を與へられなければならない。——二年ぶりであつた、火星の近接が今1928年の末の天空を賑はす。最近距離は12月15日で、8774萬キロ(2223萬里)、光輝は其の時 $-1.4$ 級であるが、時季が晩秋初冬の時であるため、アマチュアたちが此の星の景觀を楽しむのに多少の不便はある。しかし火星世界は時正に初夏の候であつて、永く吾人にかくれてゐた北極地方の珍らしい景色が見えるのであるから、望遠鏡の所有者は此の時機を失しないやうの注意が肝要である。殊に此の期には火星の位置が吾人の天頂に近い双子座を往復するのであるから、光彩に敏感な反射鏡での觀測者には此の上もなき好位置と言はねばならない。——彗星界に於いて、今1928年には、エンケ彗星の第37回出現、ホームス彗星の第4回出現、テイラー彗星の第2回出現が期待される。エンケは既に去る1927年11月13日米國ヤークス天文臺に於いて發見されたが、他の二つの彗星が果して首尾よく捕へられるや否やは多少の不安無きを得ない。しかし、過去數年間の、ドイツ國ベルゲドルフ天文臺の百センチ反射鏡、米國ヤークス天文臺の2呎反射鏡の現はしつゝある彗星發見の度々の成功は、必ず今年も人を驚かすに足るものがあると思はれる。我が京都大學のF3の中村鏡が此の方面に新路を開拓する日の早からん事も亦望ましい。——最後に、此の1928年は近世イタリアの「新天文學」開拓者アングロ・セッキ (Angelo Secchi) の死後正に50年に當る年である。セッキが簡單な對物プリズムによつて全天の輝星のスペクトルを直視し、珍らしい「天體分類學」を創始して尙ほ僅か半世紀の歲月を経たのみであるのに、其の學的系統を繼いで立つたフオゲルやピケリング等の偉才たちが急速の進歩を以つて此の新學を發展せしめ、最近、遂に225000個の恒星が、ミス・カノンのドレイバ<sup>カタログ</sup>目録の完成によつて分光器的記錄に載せられるに至つたまで、此の期間の恒星分光術の歴史は、蓋し現代の天文學史上に於ける最も花やかな部分であらう。偉僧セッキの五十年祭に際し、恒星分光學の沿革と現勢を大觀し、尙ほ無限の發展を遂げんとする將來を偲ぶのは愉快である。